

学校組織における研究推進と フォロワーシップの実証的検証

—PM理論とケリー理論に基づく模範的フォロワーの類型化と 教育的意義の考察—

学 籍 番 号 249115

氏 名 高山 翔平

主指導教員 陸奥田 維彦

副指導教員 桐村 豪文

1. 背景と意義

本研究の目的は、国立大学附属小学校における研究推進の実践を対象に、研究主任（リーダー）と研究部メンバー（フォロワー）の相互作用を明らかにし、研究活動の持続可能性を高める仕組みを再構築することである。附属校では人事交流制度により教員の入れ替わりが激しく、研究主任に業務が集中しやすい構造が存在する。その結果、研究活動の継続性が損なわれ、主任交代時に研究が停滞するという課題が顕在化している。こうした状況において注目されるのが、管理職ではない研究部メンバーによるフォロワーシップである。彼らは研究主任のP機能・M機能を補完し、研究文化の維持と質的向上に寄与する可能性を持つ。しかし、学校組織におけるフォロワーの役割は十分に理論化されておらず、特に研究推進の文脈における実証研究は乏しい。

本研究は、PM理論とケリー理論を統合した枠組みに基づき、研究主任とフォロワーの相互作用を動的に捉えることで、模範型フォロワーの行動特性を精緻化しようとするものである。従来のリーダー中心の研究推進モデルでは説明しきれなかった「フォロワーの主体的役割」を理論的に位置づけ、研究文化の持続可能性を支える新たな視座を提示する点に独自性がある。

2. 研究の内容と実践

2.1 研究推進の現状と課題の把握

勤務校の研究部を対象に、インタビュー・参与観察・文書資料を用いて研究推進の実態を把握した。その結果、研究主任に業務が集中し、研究部メンバーの主体的関与が十分に発揮されていない状況が確認された。また、人事異動による知識の断絶が研究文化の継続性を阻害し、研究主任の交代時に研究活動が停滞する構造的課題が明らかとなった。これらの課題は、研究推進をリーダー個人に依存する体制の限界を示しており、フォロワーの主体的役割の必要性を示唆している。

2.2 フォロワーシップの萌芽と関係性の構築

1年目の実践では、研究授業や事後検討会を契機に、研究部メンバーが研究主任の意図を理

解し、主体的に意見を述べる場面が増加した。研究通信の作成や授業動画の記録・共有など、情報の媒介的役割を担う行動も見られ、研究主任の P 機能（目標達成）・M 機能（集団維持）を補完するフォロワーシップの萌芽が確認された。これらの行動は、研究主任が一方的に研究を牽引するのではなく、研究部全体で研究文化を形成しようとする基盤が整い始めたことを示していた。

2.3 模範型フォロワーの機能分化と類型化

2 年目の実践では、フォロワーの行動がさらに多様化し、研究主任との相互作用が質的に変容した。質的データの分析から、模範型フォロワーの行動は「提案」「調整」「媒介」の三つの機能に分化することが明らかとなった。提案型は研究主任のビジョンを具体化し、研究主題や副題の再構築に積極的に関与する役割を果たした。調整型は、研究授業や事後検討会において教職員間の意見を橋渡しし、議論を円滑化した。媒介型は、研究通信や動画記録を通じて情報共有を促進し、研究文化の浸透を支える働きを担った。これら三類型は、ケリー理論の「積極的関与×批判的思考」を具体的行動として可視化したものであり、模範型フォロワーの内部構造を精緻化する成果となった。

2.4 相互作用の動態的分析

PM 理論とケリー理論を統合したマトリクスに基づき、研究主任と研究部メンバーの相互作用を動的に分析した結果、主任の P/M 機能の発揮の仕方がフォロワーの主体性を促進し、フォロワーの行動が主任の意思決定を補強するという双方向的関係が確認された。主任が M 機能を高めて教職員の理解を促進した場面では、フォロワーが批判的思考をもって提案を行い、研究の方向性を質的に高めた。また、主任が P 機能を強く発揮した場面では、フォロワーがその意図を具体化し、研究実践に落とし込む役割を担った。これらの相互作用は固定的ではなく、状況や時期に応じて変容する動態のプロセスとして捉える必要があることが示された。

3. 考察

本研究の分析から、模範型フォロワーの三類型は研究主任の行動を補完し、研究推進の質的向上と持続可能性に寄与することが示された。提案型は研究の方向性を具体化し、研究主任のビジョンを実践可能な形へと翻訳する役割を果たした。特に、副題の再構築場面では、フォロワーが授業経験や子どもの学びを踏まえて意見を述べ、研究の焦点を明確にする効果が見られた。調整型は、研究授業後の事後検討会で教職員間の意見を橋渡しし、議論を円滑化した。これにより、研究主任が一人で集団維持を担う負担が軽減され、組織全体の理解促進が安定して実現されていた。媒介型は、研究通信や授業動画の共有を通じて研究内容を校内に浸透させ、研究文化の継続性を支える基盤となった。異動による知識の断絶が生じやすい附属校において、情報の蓄積と可視化は特に重要であった。

以上のように、三類型のフォロワー行動はリーダー依存型の研究推進から脱却し、組織全体で研究文化を形成するための基盤となる。一方で、本研究は単一校の事例に基づくため一般化には慎重を要し、今後は他校種への展開や定量的検証が求められる。